
戦えない力

朔癒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦えない力

【Nコード】

N6192S

【作者名】

朔癒

【あらすじ】

戦争が三国で激化。戦況は均衡状態。

そんな中、ごく稀に異形、異能な者が生まれることがある。世界のその者達への反応は、様々であった。『亜人』と差別するイディア帝国、同じ『人間』として平等であるミール共和国、『天人』と崇めるワース王国。

そんな時代に『戦う力』を持って生まれなかった主人公の話。

（これは転生物ではありません。）

生前（しょうぜん）

ここ……は？

ぼく……は……だれ……？

なに……も……わから……ない……？

これは……きおく……そうし……つ？

あれ？

なにか……あたたかい？

すぐく……きもちいい……。

――少年？は手を動かした。

あれ……？すこし……しか……うごかない……？

「あなた！！　今、動いたわ！！」

『本当か！？』

なにか……きこえる……？

「ええ。名前決めとかなきゃね」

『それなら、ノルンってのはどうだ？』

――女の人の声が響いて聞こえる。

――男の人の声が遠くから聞こえる。

ああ……そうかあ……。

ぼく……まだ……うまれて……ないんだ……。

――そこで少年？の意識は深く沈んでいった。

――??――

うう……。

……まだ……うまれてないみたい……。

――少年？はまだ真っ暗な世界にいる。

「ねえ、あなた……本当に……いいの？」

また……声が……聞こえる。

これ……お母さん……？

『ああ、今の地位に未練もない』
「でも……」

――少年？の両親は真剣に話し合っている。

なにか……とまどい……？

『それに生まれてくる子供の為だ』

「……」

『この子の明るい将来の為なら、俺は何でもしよう』
「あなた……」

あたたかい……。

――少年？は真っ暗な世界の中で明るさを感じた。

「…ありがとう」

『ああ。ミーナ、さあ行こうか』

――少年？の両親は

『むこうを待たしている』

「ええ、生まれてくる子の為に行きましょう」

ああ……ぼくはきっと……しあわせになれる

――その日、少年の両親は亡命を果たした。

生前（しょうぜん）（後書き）

初めまして^^

駄文ですが、頑張つて書いていきたいです（<>）
一人でも多くの方に楽しんでもらえる小説をめざして

作者は感想や評価をいただけると、とても喜びます。

サブタイトルは、生前^{せいぜん}だと死ぬ前という意味なので、
生まれる前の意味をもった生前^{しょうぜん}にしました。
少年？となっているのは、まだ少年が生まれていないからです。

闘技（とうぎ）

ああ…、空が蒼い。
いい天気だなあ。

キーン。

――剣がぶつかり合って、音を奏でている。
――少年は目の前で闘技^{たうぎ}が行われているのにも関わらず、空を見上げていた。

ガッキーン。

――闘技をしていた者の剣が飛んだ。

「…負けました」

「闘技終了！ 両者下がれ！」

――剣を失った者は負けを認め、その場から下がった。

「次、ノルン・カリーミア対ロック・マリール、両者前へ！」

…俺の番だ。

「「はい！」」

――ノルンと相手は声を上げ、己の武器を持って前へ出る。ノルンの武器はフルーレ（練習用）と盾。

「両者！ 魔法、武術、知略、全てを駆使し全力で臨み勝利を得なさい。手を抜くことは相手への侮辱です。」

――審判（教授）はいつもの決まり文句を言い、両者を見渡した。

――ノルンは戦う構えを整え、闘技相手を見据えた。

…体型は、俺より大きい。武器はロングスピア。ロックとは初めての闘技だな。

ロックは大きな魔法を使えない。

槍は突きに特化しているが、攻撃後、つまり、突きの戻る瞬間に一瞬の隙ができる。

……よし、これでいこう！

――ノルンは戦略をたて、万全の状態で審判の合図を待った。

「……では、両者、よろしいでしょうか？」

「はい」「

――ここはミール共和国の首都ミール、その中にある最高の教育機関ミール学院。唯一の都営学院で、共和国中の優秀な人材が揃う。ここでは、魔術、武術、基本知識など様々なことを学ぶことができ、将来、軍の指揮官などエリートを多く輩出している。故に、貴族が多く集まる。また、異形、異能の人たちが半数を占めている。

――この学園の特徴は、徴兵を免除する代わりに、授業に『闘技』を取り入れているということだ。『闘技』とは基本一对一の実践形式の闘いである。

――そして、この日も実践形式の『闘技』が行われていた。

「「よろしくお願いします」」

「では……闘技開始！！」

――審判により、闘技が開始された。

…初めの一撃が勝負！！

――ノルンはわざと相手のロングスピアの攻撃圏内にはいり、相手の槍を見つめる。

――全神経を相手の攻撃に集める。

――ロックは攻撃にうつった。

突き！！……はやいが、十分かわせる。

――ノルンは、盾や剣で攻撃を受けるのを嫌う。

――彼は力が弱く、攻撃受けると押し負けてしまう。

ここだ！！

――ノルンはロックが突きから戻る隙をついて、ロックの喉元めがけてフルーレを突き出した。

「…負けました」

――フルーレは、ロックの喉元で止まっていた。

「闘技終了！両者下がれ！」

「……ふう。」

…思った通りにいった。正直嬉しい。

――ノルンは元場所に戻った。

「さすがノルンだ!」「すごい、一瞬だったね!」「なんであんなに綺麗に決まるの!?!」

――何人もの生徒がよってきた。

――ノルンは一人一人に丁寧に戻しながら、空を見上げた。

……今日も勝ててよかった。……こんなところでは負けれない。

――ノルンは学院の中で闘技において、上位にいる。

――だが、ノルンは体格に恵まれておらず、一撃でももらってしまったら、一発KOだろう。

――だから、どんな相手でも全力で集中して臨む。

「ノルン」

――闘技相手のロックが話しかけてきた。

「やっぱりかなわなかったよ。……どうやったらそんなに強くなれるんだ?」

「……努力あるのみだよ。あと……」

――ノルンは努力を十二分にしてきた。しかし、それだけじゃない。
――ある一つの思いがノルンを強くしている。それは……

「俺には絶対に負けたくない奴がいるからね」

闘技(とうぎ) (後書き)

二話目投稿しました^^

戦闘描写がむずかしいです:T|T

誤字脱字など見つけましたら、教えてください<>

作者は感想、評価が大好きです

フルーレは練習用のレイピアです。

両親

――闘技後――

――武術専攻クラスの教授が「急だけど明日編入生来るからね、はい、今日は解散」と教室を盛り上げるだけ盛り上げて、今日の学院は終了した。

――学院への編入生はめずらしい。この学院は他の学院と違い、入学試験などはない。共和国から、スカウトをして入学生を決めている。普通は新入生として入学するのだが、学院側がずば抜けて優秀と判断した場合のに、その生徒に応じた学年への編入となる。

――放課後――

「いらつしゃ……あ、おかえり」

「ただいま」

「おかえりなさい」

――ノルンの家は喫茶店だ。今日は客がいなかった。

――父親のマーク・カリーミアと母親のミーナ・W・カリーミアが経営している。ミーナのWとは、ワース王国の独自の文化らしい。

「ノルンが受け継ぐ必要はない」とミーナは言っていた。

――両親はノルンが生まれる前にイディア帝国から亡命をした。帝国でのマークは帝国直属の鍛冶師であつたらしい。腕は確かで地位が保証されていたが、ノルンの為を思つて亡命を決意した。

「ノルン、今日の闘技はどうだったんだ？」

「勝ったよ」

「さすが俺の息子だ」

……いつもそう言うけど、父さん戦えないじゃん。

――心の中でそうつぶやいたのはノルンだけの秘密だ。

――マークは子供のときから鍛冶一筋の人間だったらしい。イデア帝国では鍛冶師には徴兵が免除されている。武器・防具と兵士の比率を合わせる為だ。なので、マークは一切の戦い方を知らない。

「あら、わたしの子でもあるのよ？ はい、ノルン」

――そういつて、ミーナはコーヒ―を渡してきた。

「ありがとう、母さん」

――母親はワース王国の人間だったらしい。なぜかイデア帝国にいてマークと出会ったらしい。詳しくは本人も話したくないらしい。

「ノルン、今武術専攻クラスで何位だ？」

……きつと闘技での順位のことだろう。

――闘技では、勝ち負けによってランキングが発表される。

「クラスでは1位だよ」

「ほう。さすが…」

「はいはい、もういいですから。」

――ミーナに遮られた。

…はあ、ラブラブだな。

「わかったよ…。学年では何位なんだ？」

「まだ2位…」

「闘技はすべてのクラスと一緒に行われる。」

「強さは次の順になっている。魔術専攻クラス -> 武術専攻クラス -> 知略クラス」

「1位は魔術クラスの学生だ。」

「知略クラスは主に戦略を練る方に特化しているので、闘技ではあまりいい結果を出せていない。」

「……」

「マークは何かを考えている。」

「なあ、ノルン。……剣を持ってみないか？」

「剣を？」

「あなた…、そうね。そろそろね…」

「ミーナはわかっているようだ。」

「剣はフルーレを持っている。新たな剣を持つてことだろうか？」

「ノルンはわからなかった。」

「あまりこの国では知られていないんだが……、鍛冶師のしきたりでな。子が徴兵する際には自分と母の魔力を注ぎ込んで子の為に剣を打った剣を持たせるんだ」

「それでね。その剣には特別な話があるね」

――ミーナが昔話を話すように話し始めた。

「昔、ある鍛冶屋を営んでいる家族の子が旅にでるになった。鍛冶屋の主人は持てる技術のすべてと主人と妻の魔力を注ぎ込んで打ったの。…気持ちだけでも一緒にいたいという気持ちを込めてね。その剣には特別な能力を宿ったっていう話」

「その特別な能力って？」

「さあな。もしかしたら何もなかったのかもしれない。現にしきたりだけ残って能力はどれにもやどってないしな」

「あら、あなた夢がないわよ。子の為に打った剣には力が宿るって素敵なことじゃない」

…きつと能力はなかったのだろう。

――ノルンも現実的だった。

「…話を戻そうか。そろそろ腕も上がってきた頃だから持ってみたくないか？」

魅力的な話だ。今使っているフルーレは学院から支給されたもの。お父さんは一流の鍛冶師、能力あるなしにかかわらず、俺を強くしてくれるだろう。

「持ってみたい――！」

「よし――よく言った――！」

「どんな能力付くか楽しみね」

――その剣がノルンの運命を大きく変えていく。

両親（後書き）

説明パートです^^

次回はストーリーを進めます。

思っていることを文にするの難しいーT T

編入生（前書き）

ちょっと変更・・・（付け足しのみなのでそこまで変わっていません）

あまり変更しないようにしていきたいです＜＞

編入生

――次の日――

――剣については、どんな剣にするかがノルンへの宿題となった。

……やっぱりレイピアかなあ。刀でもいいかな…。

――ノルンは教室に着いてもずっと考えていた。

――教師と一人の女子生徒がはいってきたのにも気付かず…

――教授は編入生に自己紹介を始めさせた。

「ミスト・エールです。私はリエミアから強くなる為に来ました」

――リエミア：ミール共和国内だが、ワース王国とイディア帝国の国境のすぐそばに位置している小さな都市。

「異能を持っています。皆さんよろしく願います」

――異能と聞いた時、教室はざわめいた。

――異能とは、生まれつき人より優れた力を持っていることだ。具体的には、目が驚異的にいい、耳が良すぎる、魔力が高いなどがある。また、異能に対して異形がある。異形は、外見的な物だ。翼が生えている、体が異常に固い、力が異常につよいなどである。

――異能・異形を持った者は百人に一人位である。その中でも、異能は異形に比べ格段に少ない。

「ミストさん、何か質問はある？」

「…一つだけ。……このクラスで一番強いのは誰ですか？」
「ええと……どういう意図で聞いているの？」

――教授は予期せぬ質問に戸惑っていた。

「…私はその人と闘技をしたい」

「それは……決闘？」

「はい」

――決闘：生徒同士で教授の立ち会いのもと正式な闘技を行うこと。

……両手剣つてのもありだな。

――件の1位はまだ剣のことを考えていた。

「……ノルン君、どうしますか？」

「……………」

「ノルン君？」

「あつ、はい、良いと思います」

つい反射的に答えてしまった……。
知らない女子がいる…、編入生か…。

――前を向いたノルンは、赤い髪、緑と赤の目のノルンと同じくらいの体格の女子が立っているのが見えた。

――正気に戻ったノルンは、それまで聞き流していた話をいつきに理解した。

決闘？ええと…、すごいタイミングで頷いてしまった？

――編入生のミストは異なる2つの目でノルンを見据えていた。その瞳には強い意志と自信を感じる。

まあ、いいか…、俺は負けない。

――ノルンも自信をもって相手を見据える。

……綺麗で力強い瞳だ。…強そうだな。

「では、この後すぐの一時限目に決闘を行います。二人は準備を」

――教室がざわざわ騒ぎだした。賭けをしている生徒もいる。ノルンに声をかける生徒もいる。

「負けるなよ」「ノルン、頑張れ」「良い闘技を」「女の子だから優しくな」

…最後のだけなんか違う。

――1限目――

――たまたま闘技場を借りることが出来た。

「では……両者前へ出てください」

「はい」

――ノルンとミストは自らの武器を手に前に出る。ほかの生徒は観客席からみている。

――ミストの武器は両手剣のフランベルジェみたいだ。柄に魔導石が埋め込まれ、魔法を使える。防具に両肘両膝に鎧をまとっている。

――魔導石とは、魔法を使う時に手助けをしてくれる物だ。上位の魔法使いになるとこれがなくても魔法を使える。

フランベルジェか…、実践的な武器だな…。

魔導石も埋め込まれているのか、どの程度の魔法がくるのだろう…。防具が少ない？受けるより、避ける闘い方なのか？

――ノルンは全く強さが未知な相手なので普段より警戒している。

「魔法、武術、知略、全て用い勝利してください。手加減は相手への侮辱です。」

…異能も持つてるのも厄介だな。
闘いながら分析するしかないか…。

――ノルンはいつも通り戦略を練った。

「……では、両者、よろしいでしょうか？」

「「よろしく願います」」

「では…闘技開始！」

――この闘技が二人の出会いだった。

編入生（後書き）

ヒロイン登場です^^

初めは説明が多くなるT T

次はヒロインとの戦闘だけで終わるかな？
更新途切れさせなよう頑張ります

駄文ですが次もよろしくお願いします
評価、感想くれると踊って喜びます

決闘

「闘技開始！」

――ミストはすぐ呪文を唱え始めた。

「遍く炎の精達よ（ルティンズ デ ラ フラム）、我の目の前を
駆け抜ける（トラベズ モトレ デ デヴァント ラグメント）
」

……あの呪文は、中位の炎の弾丸の魔法。
弾は大きくないが、速い。ただ、打つ瞬間、術者の前で一瞬停止し
てから発射する。

――ノルンは頭の中で魔法の特性を確認した。

――炎の弾丸はミストの前で一瞬停止した、その瞬間に一歩横へ。

……よし。

――ノルンは無事避けれたが…

「なっ！？」

――ノルンが避けた方から、ミストの剣が薙いできた。

速いっ！？

――ノルンは咄嗟に左手の盾で剣を受ける。

「グッ！！！！？」

――体ごと飛ばされた。

「今ので決まったと思いましたよ」

――ミストはノルンが立ち上がるのを待った。

なんて力だよ…。

…それに俺が立つのを待った？

――ノルンはミストの顔を見る。

「楽しいです、もっと楽しみましょう」

俺をなめているわけではない…

こいつは…純粹に勝ちたいんだ…

倒れている相手に剣をむけるのではなく…相手にちゃんと負けを認めさせる形で勝ちたいんだ。

「ありがとう」

――ノルンは一言だけ告げ、再開を求めた。

――ミストは剣を正面に片手で構え、ノルンに突進しながら魔法を唱えた。

「遍く雷の精達よ（ルティンズ ツ トンネレ）、我の目の前を
ほとばしれ（トゥフィレズ ア ラグメント モ トレダ デヴ
アント）」

移動しながら、詠唱も出来るのかよ!?

――移動中の詠唱は簡単には出来ない。2つの行動を一度にするのと同じだ。

――前方の広範囲に雷をまき散らす呪文だ。

…この雷は目隠し。剣に集中…

――そう判断し、ノルンは雷は食らった。ほぼダメージはない。

――予想通り雷にはあまり魔力を込められていなかった。移動しながらの詠唱なので魔力を込めきれなかったのだろっ。

シュッ

――剣が縦に振るわれる。

――避けると同時にミストに向けて剣を薙ぐ。

…つよいな。これでもきまらないだろ?

――ミストは肘の鎧で剣を受ける。力の差がありすぎて、軽々と受けられた。

「っ!？」

まだだ!!

――ノルンは剣を受けられた状態から、盾を前にし、体当たりを試みた。

「きゃっ…」

…さっき飛ばされたお返した。

―先ほどのノルンほど飛ばなかった。

―いつものノルンならこんなことはしなかっただろう。

―ノルンもミストの起き上がるのを待った。

「…ありがとう」

―ミストはすぐに起き上がり、構え直した。

楽しい…。次はどんな動きするんだ!?

―ノルンはいつも以上に楽しんでいた。

「君、強いな」

「まあね」

―まだ何手かしが剣をまじ合わせていないが、相手のことを理解できた気がした。

「…次は何を見せてくれるんだ?」

「!?!?…とつておきをね」

―ノルンは挑発的に訊いた。ミストは驚いたが、先ほどとは違い正面に両手で刀を構えた。

…さつきとは構えが違う。魔法が使いつらい構えだ。

―魔法を使う際には手で魔法を操ることが多い。意思だけで魔法

を使うのは難しい。

…今までの攻撃で、魔法はただのおとり。決めは剣…
純粹な剣術！！

――ノルンは次の行動を予測した。

シュツ！！

――ただただ速く縦に剣が振るわれた。

…速いが、ただの振り下ろし？
まさか…！？

――ノルンは避けた。次の攻撃を読んで…
――その瞬間、剣筋が曲がった。再び剣がノルンを襲う。

「えっ！？」

――声が上がった。

――ただし、ノルンの声ではなく、ミストの声だった。

――ノルンは剣筋が曲がることを読んで、あらかじめしゃがんで避けていた。

――そのままノルンは突きへうつった。

「…負けました」

「闘技終了、勝者ノルン君」

――ミストは負けを認めた。

――見学していた生徒は言葉を失っている。時間にしては十分もな

かつただろう。

……ふう。

最後の攻撃…本で読んだことがあったのでわかったが…実際に見たのは初めてだ…

――ミストが近づいてきて

「ありがとう、完敗でした。楽しかったです」

「ああ、俺も楽しかった」

――まだ彼女の瞳は綺麗に輝いてる。ノルンは彼女の次の言葉がわかった。なので先に

「次も負けない」

「！？次は私が勝ちます！！」

――さっきの闘技で気になる点があった。近くにいる教授にも聞こえない声で彼女に聞いてみた。

「ねえ、ミスト…あ、ミストって呼んで良いかな？」

「何かな？ ノルン」

「君、――異能持ってないよね？」

決闘（後書き）

ちよつと戦闘描写が長くなりました^^

感想・評価いただけますと、歌って喜びます

次はミスト視点

負け、そして…（前書き）

ミスト視点です><

負け、そして…

ああ、私負けたんだ…

――ミストは首に剣を突きつけられていた。

「…負けました」

「闘技終了、勝者ノルン君」

負けた…でも、楽しかった。

――ミストはノルンに近づいた

ノルン君かあ…力弱いし、動きも速くないし、魔法も使えないのか
な？

でも…

すごいなあ…

「ありがとう、完敗でした。楽しかったです」

「ああ、俺も楽しかった」

…また戦いたい

「次も負けない」

「！？次は私が勝ちます！！」

――ノルンにはミストの気持ちが見えているようだった

「ねえ、ミスト…あ、ミストって呼んで良いかな？」

ドキッ…

――ミストは名前を呼ばれ心が騒いだ。

――ミストは返事の代わりに…

「なにかな？ ノルン」

――次の言葉で、またミストの心が騒ぐ。

「君、戦う異能持っていないよね？」

…戦う異能？

なんのことだろう…？

「…そうだよ」

「後でいいかな？」

――それだけ言って、ミストの答えを聞かず、見学していたみんなの元に行った。

――その後、みんなに囲まれたがよく覚えていない。

――昼休み――

――ミストとノルンは屋上に来ていた。

「今日の決闘ありがとな」

「いえ、こちらこそありがとうございます」

「うーん……敬語はなしにしない？」

「うん、ありがとう」

「ノルンは手すりにもたれた。」

「ミストは強いね。最後読めてなかったら負けてた」

私のおき...

読まれたのは初めて...

「なぜ読めたのですか？」

「敬語」

「すみません、なぜ読めたの？」

「あの技、本で読んだことあったから」

本に載ってるの？

ちよつとシヨック...

「あの技はミストが苦労して自分で編み出した技だった。」

でも、もしかしたら...

「ねえ、その本なんて本？」

「ええと、たしか... 『剣術上書』かな。図書館にあるから今度行ってみなよ」

「うん。ありがとー！」

今度見に行こ...

あつ...

「ミストはノルンに呼び出されたことをおもいだした。」

「すみません！…あの何の話ですか？」

「敬語……、相談あるんだけど良いかな？」

相談？

「すみませんっ、はい、いいよ。」

――ノルンは苦笑している。

「謝ってばかり」

「あう……」

「ミストってフランベルジェ使ってるよね？ どうしてあの剣にしたの？」

「うーん、難しい質問だね……」

なんでだろう？

たしか……

「インスピレーション」

「え？」

「武器屋の模擬剣で『これ！』ってのがフランベルジェだったの……」

――ノルンは何かを考えている。

「あの……ノルンは、剣を探してるの？」

「ああ、ずっと持つパートナーをね」

私に勝った人……

でも、まだまだ強くなろうとしている。

「なら、いろんな剣を試してみようよ？ 探すの手伝っから！」

やっぱり、すごいなあ…ノルンは。

ーノルンの力になりたい、そうミストは願った。

「いいの？」

「うん。…ねえ、よかつたらー」

ーミストは笑顔で

「ーともだちになろう」

いっちゃった…

きっと、わたし…顔真っ赤だ…

ノルンも変に思ってる…よね…？

「うん、友達になつてよ」

ーノルンも笑顔で即答した。

…えっ！？

「だから、友達になつてよ。俺も言おうと思ったんだ」

ーきっとノルンの優しさだろう。

「ありがとね」

…言えてよかった

「ねえ、今日の放課後あいてる？」

負け、そして…（後書き）

ちょっと更新おくれましたTーT

感想、評価、アドバイス、歌って踊って喜びます

『ともだちになろう』

これをどうしても入れたかったです<>

親友（前書き）

ノルン視点に戻ります。

親友

「ねえ、今日の放課後空いてる？ …… 見せたい所あるんだけど」

――ノルンにはこの町で見せたい所があった。

――ミストは嬉しそうに

「空いてるよ」

――放課後――

――ノルンはミストと町へ繰り出した。

――ミストはノルンに学院のことや町のことを聞いているうちに、ノルンは店の前で立ち止まった。

「この店…… N・o・r・n…… 『ノルン』？」

――ミストは目の前の店の名を読み上げた。

「とりあえずはいつてみてよ」

「うん…」

――ミストは恐る恐るドアを開いた

「いらっしゃーい、とおかえり」

「…？ おかえり？」

――ミストはノルンに『どういうこと？』と訴えている。

「あら、ノルン、おかえりなさい。女の子連れてくるなんて初めてじゃない？」

「ここ、俺の家なんだ」

「あ、そうなんだ…」

「ミストは納得いったようだが、どうして良いのかわからないのか店を見渡している。」

「ミストとノルンがカウンターに着くと」

「よお、ノルン。その子が噂の子か？」

「あ、アル来てたんだ。噂の子かはわからないけど、編入生だよ。ミスト、適当に注文しなよ」

「そうそう、ノルンの友達なら全部サービスするよ」

「おじさん、俺そんなにサービスされてないっすよ」

「ノルンがお前を抜かしたらサービスしてやるよ」

「それなら、サービスいらないね」

「アルはノルンの幼いときからの親友だ。学年ランキング1位の件の人である。」

「あらら、ノルン。紹介してくれるかしら」

「ああ…、今日編入してきた、ミスト・エールさん」

「ミストです、よろしくお願いします」

「ペこりつと、ミストは頭を下げた。」

「俺はこの主人、マーク・カーミア、ノルンの父親だ。よろしく、エールさん」

「私、ミーナ・W・カーミア、ノルンの母親よ。よろしくね、ミ

ストちゃん」

「W……？」

「Wは、私の故郷の名残なの。友達感覚でミーナって呼んでね、あつ、お母様でもいいわよ」

母さん……

「ええと……ミーナ、マークさん、カルボナーラお願いしても良いですか？」

「はいよ」

――そう言い、マークは厨房に向かった。

「アルも挨拶しなよ」

「ああ、アルヴァ・トートだ。魔術専攻クラスで二年次、ちなみにノルンより俺の方が強いぜ」

「ノルンより……！？」

「ああ、まだ一度も負けたことないね」

「アル、ひどいなあ。……事実だけどねえ」

「ははは。ミストさんだっけ？ ノルンにぼこぼこにされた子だよな？」

「……ぼこぼこ？」

あ、ミストと被った……

「ノルン、あなた、こんなかわいい子に何したの！？」

――ミーナがすぐさま怒ってくる。

「違うよ、母さん、ただ決闘で戦っただけだよ。アルもおもしろが

って……」

「噂では、そう聴きいたけど？ おばさんこれ見る？」

あつ、アル……

――ミーナは声を低めに……

「……おばさん？」

「おつと……ミーナさん、これ見る？」

――アルヴァは本の形をした物を取り出した。

「それって、MagicROM？」

「MagicROMって？」

――ミストは知らないようだ。ノルンはミストに説明を始めた。

「MagicROMは、魔術を使って立体的な動画を録画・再生する物だよ」

「ほへへ、すごいね。もしかして、私とノルンの決闘ですか？」

「そ、朝の決闘のMagicROM」

「見たいです」

アルヴァには敬語なんだ……

「はい、カルボナーラ」

――戻ってきたマークとミーナ、ノルン、カルボナーラを食べているミスト、アルヴァでMagicROMを囲んで見た。

――見終わって、皆各々感想をいい始めた。

「ミストちゃん強いよね!」

「さすが俺の息子。エールさんもなかなかやる」

「ミストさんの最後の技…俺には……」

アル、また考えてるな…

――アルヴァはいい戦いを見ると、自分ならどう戦うか考える癖がある。十分くらいかえってこない。

「エールさん最後の技は、自分で編み出したの?」

「はい、でもまだ未完成です」

え!? あれって自分で!?

それに… 未完成って…

「あの技はその剣には向いていないね。ちょっと重すぎる」

「!?!? はい、でも……なぜ?」

「父さんは昔、腕のいい鍛冶師だったんだ」

「鍛えるか、剣を変えた方がいいだろう」

「あなた、もう鍛冶師じゃないんだから…」

――マークは剣の話をする和多弁になる。

――その度に、ミーナは悲しそうだ。

「ああ、そうだな… わるかっただね、エールさん」

「いえ、ありがとうございます」

「ミストちゃんはいつこの町にきたの?」

「昨日の夜、着いたとこだよ」

母さんには敬語じゃない？

男と話すの慣れてないんかなあ…？

「じゃあ、あれ見てないのよね？」

「うん、これから、あれ見に行くつもり」

「あれって？」

「うーん、着いてからのお楽しみ」

「ーわかっていないのはミストだけのようだ。」

「ーちなみにアルヴァはまだ頭の中でミストと戦っているようだ。」

「じゃあ、そろそろ行った方がいいかもね」

「そうだね、じゃあ、ミスト行こうか」

「あ、はい。ご飯ありがとうございました。おいしかったです」

「ああ、いつでも来なよ」

「またいらっしやいね」

親友（後書き）

投稿ゝ頑張りました^^

このまま毎日投稿したいです

小説書いててストーリー以外で一番悩むのがタイトルとサブタイトルT | T

次はキャラの名前T | T

感想とかくれたら泣いて喜びます

歓迎

「ノルン、どこ行くの？」

「ミストに見せたい所」

「『Norn』じゃなかったの？」

「ミストは『Norn』を出てから、ノルンに引っ張られ少し走っていた。」

「違う…っと、間に合ったかな」

「ノルンは足を止めた。」

「そこは町にはいる門のある広場だ。」

「…ここ？」

「うん、そろそろ…」

「日が沈みそうな位暗くなっていた。」

「ねえ、ミストはこの町が何で首都かわかる？」

「国の真ん中にあるから？」

「ミール共和国の首都ミールは、ほぼ共和国の中心にある。」

「しかし、ミールは大きい都市ではない、大きな町という表現の方が正しいだろう。それに、首都とはいつでも、政治、軍事の中心は別の都市にある。唯一あるのがミール学院だ。」

「首都である理由は…」

『うたえ、せかい。うたえ、うんめい』

「…何か聴こえる？」

「いや、聴こえてない、心に響いてる。

「優しい声だ。

「ノルンは答えを唄った。

『「ここは、せいいいにしゆくふくされしよしよ」』

『「せいいい」』「わたし」』「は、あなたをこばまない」』

『「さあ、かんげいしよう。あなたを」』

「ただただミストは聴き惚れていた。

「ノルンは足を着き、手をミストに差し出した。

『「さあ、てをつなぎあゆもう」』

「手を取って」

「…うん」

「ミストが手を取ると、二人を光が纏う。

「その光が空へ飛ぶ。

「そして、光は町中にはじけ、色を様々に変え降ってくる。

「きれい…」

「ミストは空を見上げている。

「光がすべて消えるまで…」

「いまのは？」

「『精霊の歓迎』、この町がミストを歓迎したんだ」

「…歓迎」

「ここは精霊に愛された町ミール。この町にようこそ、ミスト」

「ミール、精霊から祝福された町。日が沈む時、精霊の歌が歌われる。」

「人が精霊の歌に合わせ、人を歓迎した時に起こる奇跡、『精霊の歓迎』。」

「ーありがとう、ノルン」

「ミストはまだ空を見上げている。消えた光を見る。」

「喜んでもらえたかな？」

「ー精霊の歓迎後ー」

「ミストって寮だね？ 送るよ」

「ミストは頷き、ノルンの横によつてきた。」

「どれくらい歩いただろうか。ただただ静かに歩き続けた。」

「ー今日はありがとうね」

「いいよ」

「ありがとう」

「お礼言い過ぎ」

「ーノルンは少し照れている。照れ隠しに…」

「どれに対してありがとうなのかな？」

「戦ってくれたこと、友達になってくれたこと、素敵な歓迎してくれたこと、全部だよ」

…ますます照れる

「ノルンにあえて良かった…。明日から武器探ししよ?」

「ミストも照れてるのか、すぐ話を変えた。

「ああ、よろしく頼むな」

「うん!…あつ、寮だ。じゃあ、また明日ね」

「じゃあ、また明日」

「手を振って別れた。

歓迎（後書き）

ラブコメパートになりました^^

次はちょっと話とぶかな？（^^；

感想と評価お願いします<>

店の名のノルンは『Norn』と表記します。

この世界での精霊は、神様みたいなもの

ノルンの剣（前書き）

一日空きましたー

ノルンの剣

――ミストが編入してきて半月が経った。

シュッ

――ノルンの剣がミストの喉元に突きつけられる。

「……ふう。今日も俺の勝ちだな」

「……また負けた」

――二人はノルンに合う剣を探していた。

――学校の剣をかり、毎日ミストと試合をしている。

――もう五十本くらい試しただろう。それでも、ノルンはミストに一度も負けていない。

「この剣もだめだな」

「この学院にもう剣ないの？」

「もう、全部試したのか……。……じゃあ、剣屋（けんや）でも行くか」

「剣屋ってこの町にあるの？ 私も行きたい」

「この後、行こうか」

――練習後――

――二人は町の端にある刃物屋に来ていた。

「ここ刃物屋じゃないの？」

「まあまあ、入るよ」

――ノルンは先に入って行った、その後にミストが続いて入った。

「おじちゃん、こんにちは」

「お邪魔…します」

「おお、ノルン坊、久しぶりだね」

――優しそうなおじさんがノルンを出迎えた。

――おじさんは子供に言うように優しく

「今日はお使いかい？」

「いや、今日は奥に」

「おお、それはそれは。後ろのお嬢さんもかい？」

「…はい」

――ミストは分からないだったが、空気を読んだみたいだ。

「二人とも付いてきな」

「…ねえ、ノルン。そろそろ説明して欲しいんだけど…」

「ああ…、ここはうちの店がお世話になっている刃物屋で、奥で剣も扱ってるんだ」

――おじさんは奥の扉を開いた。

「さあ、入って」

「えっ!？」

…久しぶりだ。また増えたなあ…

――そこには部屋いっぱい、剣がおかれていた。

「……これ、何本あるんですか？」

「何本だったかな、千は超えてる。さて、ノルン坊と可愛いお嬢さんは何の用かね？」

「今日は剣を見せて欲しいんだ」

「私は…ちよつと剣を見てくださいますか……？」

ミストの剣、調子悪いんだろうか…？

「ああ、見てみよう。ノルン坊は勝手に見回ってくれて結構だよ」

「ありがとう」

「いやあ、懐かしいね。ノルン坊は小さな頃に、ここに通っていてね、剣のことをよく訊いてきたんだよ」

「ノルンは昔から変わってないんですね」

「ほう、これは是非、ノルン坊の今を聞きたいね。さあ、お嬢さんの剣を見ようか」

――なにやら、ミストとおじさんはいろんなことを話している。

さ、俺は剣を見回ろうか…

まずは、昔なかった剣から…

「この剣は…」

「フランベルジェでもっと軽い物はありませんか？」

「……ないね。それよりも、この剣は泣いている」

「泣いている？」

「お嬢さん、あなたにこの剣はあってないね」

「！？どういことですか？」

「この剣にとってあなたは強すぎる、剣が悲鳴をあげている」

「ミストのあの技に剣がついていけないのだろう。」

「ノルンは剣を見ながら、話を聞いていた。」

「ここには、お嬢さんに合う剣はないね。それはノルン坊にもいえることだろうけどね。」

「ミストはただただ自分の剣を見つめた。」

「この剣。。。」

「ノルンは一つの剣に強く心が引かれた。」

「その剣を手にする。」

「!?これだ..」

「まだこの剣で戦っていない。しかし、ノルンは確信した。」

「おじさん、これは!？」

「ああ、それは戦えない剣じゃよ。ワース王国の王室の剣のレプリカ。もとの王室の剣は、もちろん使えるがね。それを打った鍛冶師には腕が足りなかったのだろう、それは非常に脆く、すぐ折れてしまふ。戦える剣は最高級の鍛冶師じゃないと作れないだろう。」

「レイピアの形状に似ていた、ただ剣身がレイピアのように細いのだが、突きに特化しているのではなく切ることに特化させた剣だ。細身なのに、鋭い刃である。」

「ただただノルンの手に馴染んだ。」

「ノルン、それにするの?」

「ああ、これだ。おじさんありがと、鍛冶師には当てがあるんだ。」

この剣借りて行くよ」

「ああ、持つて行ってくれ。剣が完成したら、是非見せにきておくれよ」

「はい、行こうかミスト」

「ちよつとノルン！？お邪魔しました」

――ノルンはミストの手を引いて、店を飛び出して行った。

ノルンの剣（後書き）

毎日更新はきついですが>

更新がとぎれとぎれになるかも……ご容赦を……m（　　）m

感想、評価を待ってます

試合と闘技、決闘の違いについて

試合：生徒が勝手に行く

闘技：教授立ち会いの基の真剣勝負　ランキングに関係する

決闘：教授立ち会いの基の真剣勝負　ランキングに関係しないが、

本人達のプライドを掛けて戦う

重要度は、試合>>闘技>決闘　です

剣屋けんやとしたのは（けんや）って表現がなんだか嫌いだったからです。
他意はありません^^；

ミストの剣（前書き）

ミスト視点です

ミストの剣

「二人は『Norn』に着いた。

「ただいま」「邪魔しまゝす」

「おかえり、今日は遅かったわね」

「ミストとノルンは剣探しの後、いつも『Norn』へよっていった。

剣も見つかったし、今日でおわりなのかな…

「刃物屋行ってたんだ、剣見つけたよ」

「おお、やっと見つけたか。どんな剣だ？」

「マークは店の奥から出てきた。

「ノルンは借りてきた剣を出した。

「これは…。うーむ、難しいな」

「…父さんでも、無理かな？」

「どんなの？ 私にも見せてよ、……………えっ!？」

「ミナ…？」

「ミナはノルンの持ってきた剣をみて驚いている。

「……ノルン、本当にこれにするの？」

「うん、これに決めた」

「ミナ知ってるの？」

「ええ、ちよつとね……この剣はワーサリア、帝国の王剣よ」

なぜ、ミーナ知ってるの……？

――ミストはミーナが王国出身だと知らない。

「ワーサリア……」

――ノルンは剣を見ながら復唱した。

「そうか、ミーナ良いんだな？」

「……ええ。ノルンが決めたことですもの」

「わかった。しかし、ノルン、この剣は時間がかかるぞ」

「いいよ。最高の剣をお願い」

「ああ、任せろ。エールさんありがとう、ノルンにつきあってくれて」

「いえ、そんな……」

……本当はもつと付き合いたい

「……エールさん、剣は何の為にあると思う？」

！？……剣は何のため……？

――マークは唐突にミストに質問をした。

――ミストは突然の質問にすぐ答えなかった、マークは問い直す。

「君は何に剣を使いたい？」

――マークは真剣にミストの目を見ている。

私は…私の剣は……

「……勝ちたい人がいます。勝って、取り戻したい物があります」
「その人に勝てたら、その人をどうする？ その後はどうする？」

――マークはいつになく厳しく問う。

「私は何があっても人を殺しません。その後は力を持たない人を守りたい」

「……」

――マークはまだミストの目を見ている。

「……よし、合格だ」

――マークはいつものやさしさに戻り、カウンターの下から長い包みを出してきた。

「エールさん、これを受け取ってくれ。ノルンと仲良くしてくれて
いるお礼だ」

「…これは？」

――ミストは包みを解いた。

――ノルンとミーナは横で見守っている。

――そこには

「フランベルジェ」

「正しくは、フランベルク、フランベルジェの片手剣だ」

「ミストが今使っている物よりも、少し短い。魔導石も柄も部分に埋め込まれている。」

「剣身にはフランベルジュにはない紋が繊細に表されていた。」

「これを私に？」

「ああ、俺の最高の技術で作った最高のフランベルグだ。使ってくれるかな？」

「ミストちゃん、この人はノルンと仲良くしただけでは剣を打たない、認めた人にしか剣を託さない。私もあなたにこの人の剣を使つて欲しいの」

「ミストは手に持ってみる。」

「今使っているフランベルグより、とても軽いし、手に馴染む。」

「こんな良い剣……、いいんですか！？」

「この剣は君の為に打つたんだ。きっと君はこれで強くなれる」

「強くなれる……」

「ノルンに勝てないことでミストは伸び悩んでいた。」

「あの人に勝つ為にもっと強くなる！」

「ありがとうございます！」

ミストの剣（後書き）

心情描写多めにしてみました<>

感想、評価お待ちしております

ミストの實力、次の壁（前書き）

ノルン視点に戻ります。

ミストの實力、次の壁

――闘技――

……ふう。

――今日もノルンは勝った。

――次はミストと学年3位の娘の闘技だ。

「闘技開始！」

――ミストは昨日受け取った剣を使っている。

あの剣……ミストはどう強くなるのか…見物だな。

3位が相手なら、てこずるだろうな…

あの剣のミストの強さをはかってやる！

――ノルンはいずれまた戦うライバルとの戦いを考えていた。

シュツ

えっ！？

「えっ！？……負けました」

――ミストのやったことは単純だった。

――ただの一瞬。相手に詰め寄り、剣を突きつけただけだ。

――ただただ恐ろしい速さで…

……なんだあの速さ!?

「……勝者、ミストさん、ランキング3位へ」

――審判も驚き、反応が遅れた。

――戦い終わってノルンが近づいてきた。

「ノルン、見えた?」

「ああ……ぎりぎりな。あの速さは?」

「この剣もつてみてよ」

――ミストはあの剣を渡した。

「えっ!?!」

……信じられない。

――剣はある程度の重さがある。

――しかし、マークが作った剣は重さを感じなかった。

「この剣ならノルンに勝てるかも」

「……俺は負けない」

――そう言い、剣をミストに返した。

……実際に戦ったら、どうだろうな。
ただ次、戦う時は……

「次は本気で」

――放課後――

「よお、ご両人」

――二人は帰ろうとしていると、アルヴァに声をかけられた。

「あ、アル」「こんにちは」

「ミストさん、掲示板見ました？」

…相変わらず敬語どうしだな

――ミストとアルヴァはお互い敬語だ。

――掲示板には主に闘技関係のことが張り出される。

――ランキングや闘技日程などだ。

「まだ見てないです」

「じゃあ、帰りに見てくるといいよ」

「はい」

「じゃあな、ノルン、ミストさん」

……アル、なんだか気合いが入ってる？

――アルヴァは足早に去って行った。

――二人は掲示板を見に来た。

「あつ、ノルン。明後日の日程、発表されてるよ」

「本当だ、俺は誰とだ？」

…俺は今日のミストの相手か

――学年ランキング4位の人だ。（ミストに負けて、3位から4位に下がった）

…今日の戦いと比べられるな。
絶対に負けられない！

「ミストは？」
「……………」

――ノルンはミストの名を探した

…あつた。

アルヴァ・トート VS ミスト・エール

「アルヴァさんと……」
「アルとか……………」

――アルヴァは依然として1位に居座っている。

だから、アルあんなに気合い入っていたんだ……

――掲示板見てから、二人は無言で帰り道歩いていた。

「……………」
「……………」

ミストとアルの戦いか…

「……ねえ、ノルン」

「うん？」

「ノルンはアルヴァさんと戦ったことは？」

「…試合なら何度でも、闘技はまだないね」

「本当にノルンは勝ったことないの？」

「ああ…」

…ただ一度も勝てなかった。

俺の一番勝ちたい相手……

「戦い方は訊かない、私は実力で勝ちたい」

ミストらしいな。

――まだ半年だが、お互い性格はわかっていた。

「じゃあ、一つだけ」

「なあに？」

「アルは、異能持ちだ。『魔法制御』の異能」

――皆の知っている情報だった。

「異能持ち……」

…ミストも異能持ちだと言っていたなあ
うん？ ミストの異能ってなんだ？ まあ、次の戦いで見られるかもな…

「アーノルンはまだミストの異能を知らなかった。

「アルは強いよ」

「うん、でも、私が勝つ!!」

ミストの実力、次の壁（後書き）

がんばりました^^

そろそろ毎日更新はきついです…

感想、評価待っています。

ランキングは、順位が低い者が勝った場合、順位が高い者の順位になる。

天使のような少女（前書き）

新キャラ登場です

天使のような少女

……明日かあ

――3位と1位の戦いの前の日。

――学院が終わって、ノルンは一人で帰っていた。

――ミストは、『今日は集中したいから先帰るね』と。

ミスト、緊張してるな……

どっちが勝つのかな……？

「キャッ!？」

――ノルンは考えごとをしていると、小さな少女にぶつかった。

「あつ、ごめん」

――少女に手を差し伸べる。

……天使？

――少女は異形だった。背中に純白な羽、小さな体に見合った可愛い翼だ。

――目は金色、髪は金髪、人形のような娘だ。

――異形で羽があるのは特に珍しくない。代表的な異形は羽だ。

――しかし、ノルンは少女のような純白な羽は見たことがない。

「ありがとうございます。あれ……?」

「少女はノルンの顔をまじまじと見ている。

「あの！！町、案内してもらえませんか？」

「え……？」

人懐っこい子なのか……？

町の案内？ 旅の子？ こんな小さい子が一人で？

「ノルンはいくつも疑問を持ったが……」

今日は予定ないし、いいか、それに……

こんな小さな子を一人にするのは忍びない……

「あの……、だめでしょうか？」

「いいよ、俺はノルン・カーミア。君は？」

「アリシエル・ダ……ルラー。アリシエル・ルラーです。アシルつてよんでください」

アシルか……アリ、アリシはおかしいもんな。

「ノルンはどうでも良いことを考えていた。

「よろしく、アシル。どこから案内しようか？ 行きたい所ある？」

「カーミアさんに任せます」

「ノルンって呼んでよ」

「ノルンは名字で呼ばれることを避けていた。店で名字で呼ばれると誰か区別がつかないからだ。

「はい、ノルンさん」

「じゃあ、公園とか回ってみようか」

「はい、あの……手にぎつても……いいですか？」

慣れない町で不安なのかな……？

「いいよ」

――ノルンは子供の多い場所を選んで回ることにし、手を繋ぎ歩き始めた。

「アシルは一人でこの町に？」

「いえ、ご……お母様ときました」

「ひとりで町歩いたら危ないよ？」

――アシルは笑顔で

「一人じゃありません、ノルンさんと歩いてますから」

――アシルの笑顔は可愛かった。

――その後、ノルンは町を案内した。

――どうやら、アシルは前住んでいた所が良い状況ではなかったらしく、この町に避難してきたようだ。

――当分この町に滞在するらしい。

――アシルはしっかりしている。

――ノルンは最後に『Norn』に来ていた。

「おかえり」「おかえり……っと、いらっしやい」

「ただいま」

「ここノルンさんのおうちですか？」

「そうだよ。父さん、アイス一つ」

「ノルン、今度はそんな小さな女の子連れてきて……」

「最近人付き合いよくなつたな。はい、アイス」

――ノルンはマークからアイスを受け取った。

――ノルンはあまり人付き合いが良い方ではない。

――今でも友達と呼べるのはミストとアルヴァだけだ。

「はい、アシル。これは僕からのプレゼント」

「ありがとう、ノルンさん」

「アシル……？」

うん？……ああ、紹介してなかった

「父さん、母さん。この子は、アリシエル。町で知り合ったんだ」

「よろしく願います」

――アシルはかわいらしく頭を下げた。

「アリシエル……ま……かちが……ね……」

――ミーナは小声で、なにかつぶやいていたが、すぐにいつものミーナに戻り

「ノルンの母親のミーナです、よろしくね、アシルちゃん」

「父のマークだ。よろしくな。ノルンの知り合いならサービスするから寄りなよ」

「はい、ありがとうございます」

この店、つぶれないだろうか……？

――ノルンは店を心配した……。

――アシルはいくつかアイスを食べ終わった頃には暗くなっていたので、ノルンはアシルを送り届けた。

――綺麗なアパートの前でアシルは

「あ、ここです。今日はありがとうございました」

「ああ、いいよ。じゃあ、またね」

「はい、またです」

――アシルと別れた。

――ノルンは夜道を歩きながら、伸びをし

うーん、良いリラックスになった。

さ、明日は闘技だ。

天使のような少女（後書き）

今回、場面移動が多かったです^^；

感想、評価待ち続けます

アシルは意外と重要人物かも？

1位VS3位

「闘技開始」

――少女は魔法を唱え始めた。

「火よ（フェウ）、行け（エトラン）」

――炎の初級魔法。簡単なほど威力が弱く、詠唱が短い。

――魔法が少年に撃たれた。

――少年は簡単に避けるが、少女は続けて魔法を唱えた。

…続けて詠唱か。

――ノルンの闘技。闘技相手は魔法専攻の少女、学年4位だ。

――ノルンは剣に加え、短剣を一つ腰に添えている。

――これはノルンの魔法専攻と戦うときの装備だ。

「水よ（エアウ）、覆え（コオウズレ）」

――まだ続ける。

「雷よ（トンネレ）、鳴け（アペレ）」

レイト魔法…？

――レイト魔法、呪文だけ唱え、魔力を込めないことで魔法の発動を送らせる。

――それだけなら簡単だが、その状態での詠唱は高度な技術が必要

だ。

「いくつのも呪文の後、一気に魔力を込めることで一気に魔法を発動できる。」

「土よ（ソレ）、掴め（アトラペーレ）」

三つも……すごいな、でも……

「水は周りから、雷は目の前から、土は下から、一気にノルンを襲う。」

「ノルンは一歩横へ」

「水の魔法だけは避けられなかった……」

「グッ……」

なかなかの威力だ……でも……

あんな魔法の後、すぐにはうごけないだろう？

シュッ……

「ノルンはすかさず、短剣を投げた。」

「短剣は相手の首をかすめた。」

「相手はもし数センチずれていたら、と考えたのだろうか、顔が蒼白になり」

「……負けました」

「闘技終了、勝者ノルン」

……ふう。ちょっと痛かったな……

――1発ずつ撃たれたら、ノルンも苦戦したかもしれない。

――ノルンは普段なら一撃も受けることはなく、時間をかけて確実に勝利しただろう。

――前のミストの試合を思い出し、一手で勝ちたかったのだ。

さ、次はあの二人の戦いだ。

――闘技の順は、注目度の高い戦いが後に回される。よって、次は最後の闘技。

「次、アルヴァ・トート対ミスト・エール、両者前へ！」

「はい！」

二人とも気合いたっぷりだな……

「両者！ 魔法、武術、知略、全てを駆使し全力で臨み勝利を得なさい。手を抜くことは相手への侮辱です。では、両者、よろしいでしょうか？」

「はい！ よろしく願います」

「闘技開始！」

――二人の対決が始まったが、アルヴァは構えていない……

「やあ、ミストさん。本気でいくぜ」

「……勝たしていただきます」

――ミストは返答したが攻撃にはうつらない。

ミストらしいな……。

――相手が構えてから戦う、それがミストの信念だ。
――決して、無防備な相手には攻撃しない。

「さあ、やろうか」

――アルヴァは構え、魔法を唱え始めた。

「火よ（フェウ）、水よ（エアウ）、雷よ（トントレ）、木よ（ア
ーベレ）、土よ（ソレ）、漂え（ジエ デリヴ）」

いきなり…あれか……

アルだけの魔法……

――ノルンは何度もアルヴァと戦っている。アルヴァの魔法は知っ
ていた。

――宙に、火、水、雷、地に、木、土が輝いていくつも現れた。し
かし、動かない。

――つまり地雷だ。

ミスト、動けなくなっ たな…

「さあ、どうする？ ミストさん」

シュパッ…

「！？」

え！？魔法を切った…？

――ミストは地雷を切った。つまり、魔法を切った。

「――普通、魔法は切れない。魔法、魔力の固まりは非常に固い。それも、アルヴァの魔法なら格別に…」

「――それをミストは紙を切り裂くように、スパツと切った。そのままアルヴァに近づく。」

「――アルヴァは急ぎ魔法を唱え始めた。」

「水よ（エアウ）、覆…（コオウ…）」

「…遅いです」

「――アルヴァは詠唱の途中に攻撃され、避けたが…」

「――ミストは剣筋を曲げ」

「私の勝ちです」

シュツ…

「――ミストの剣がアルヴァを襲う。」

1位VS3位（後書き）

ノルンの戦いが少ない気がする、入れてみました^^

感想評価お待ちしております。

1位の實力（前書き）

ミスト視点です

1位の實力

「私の勝ちです」

シュツ…

――ミストの剣はアルヴァを襲う。

グッ…

！？…なんで？

――ミストの剣が止まった。

――剣はアルヴァの首で止まっているのではない。

――アルヴァの肩の上、宙で不自然に止まっている。

これ以上振り切れない…！？

「これは切れないのか。火よ（フェウ）」

――アルヴァは短い呪文を詠唱した。

――その呪文には呼びかけしか与えられていない。

――呪文は呼びかけ（つまり、顕現する物）に指示（顕現した物への命令）で構成されることが多い。

――しかし、術者の魔力が届く範囲なら、呼びかけだけで、そこに顕現することができる。

ボッ…

――ミストの足に火がついた。

「うっ…、水よ（エアウ）」

――魔法で火を消し、下がった。

何か、壁みたいなものに防がれた…それなら！！

「遍く地の精達よ（ルティンズ ツ ソル）、空に舞い我の敵を囲め（ジェ ダンセ ダンス レ シエル エスト カパブル アウター デ モデミ）」

…見えた。これはずるいね…。

――ミストは、土を相手の周りにまき散らす魔法を使った。本来は目くらましの魔法。

――アルヴアの周りには土煙が入っていない。アルヴアを囲む壁があるようだ。

でも…もしかしたら……

「見破るだけじゃ勝てないよ」

「火よ（フェウ）、行け（エトラン）」

――ミストは魔法を放った。

――アルヴアに対してではなく、アルヴアの横の空間にだ。

――アルヴアは動かない。

――ミストの魔法は壁を通過した。

やっぱり…まだチャンスはある！！

「なるほどね、ノルンは勝てないね…」

「なかなかやるね、ミストさん」

物理的な物を防ぐ壁…、剣だけのノルンじゃ勝てないね…
でも、私は魔法が使える！！

――ミストはアルヴァに向かって駆けた。

「雷の精よ（エスピリット　　ツ　トンネレ）、私の剣に纏え（エス
ト　カパブル　　ア　ダンス　　エピエ）」

――剣に補助魔法をつけた。ミストの剣は雷を浴びている。

――その剣でアルヴァを突く。

シュツ…バチツバチツ…

――剣はアルヴァの前で止まったが、雷はそのままアルヴァへ向かった。

「おっと…ちよつとバチツときたな」

――アルヴァは軽く避ける。

私の攻撃が通る！！

――まだ剣には雷が残っている。

――そのまま剣筋を曲げる。

シュツ…バチツ…

「くっ…!？」

――アルヴァはダメージを受け、膝をついた。

――ミストの剣は雷がなくなり、追撃が出来ない。

「まともに攻撃受けたのは久しぶりだよ……」

ゾッ…

――ミストに背筋が凍り付くような感覚が襲った。

――すぐにアルヴァから距離をあけた。

さっきのアルヴァさんとは違う……？

「ミストさん……ちょっと本気を見せてあげる」

壁がなくなった……？

――わずかに残っていた砂煙がアルヴァに触れる。

いまなら…

――ミストは相手へ駆け斬りつける。その間にアルヴァは呪文を

「我が魔力よ（モン ポヴォイア マギクウ）、純粹な力で敵をは
じけ（レトウネズ エネミ パ ポヴォイア）」

…聞いたことない呪文。でも、顕現より私の方が速い!!

ドンッ!?

――ミストの体に衝撃が走った。

…あれ? なにか…おき…………た…………

――そこでミストの意識が途絶えた……

1位の實力（後書き）

前の続きなので、すこし短くなりました（^^；

なんだかミスト視点多い気が…。

感想、評価待っています

感想戦・ダメ出し（前書き）

またまたミスト視点

感想戦・ダメ出し

「うう……」

「ミスト!？」

「お、目覚めたか」

――ミストはベットで横になっている。

――そばに、ノルンとアルヴァがいる。

「ここは……?」

「保健室だよ」

――ミストは悔しそうに

そっか……

「私、負けたんだ……」

「ああ。…もつと上で待ってるぞ」

――アルヴァはミストに『もつと強くなれ』と

――そして、去って行った。

「悔しいな……」

「ミスト……」

――放課後――

「勝ちたかったなあ……」

「……これでまたミストは強くなれる」

きつとノルンもアルヴァさんに負け続けて強くなったんだ…

「うん……そうだね」

「あ、そうだ。昨日、町で面白い子と出会ったんだ」

――ノルンは気を使ったのか、話を変えた。

「どんな子？」

「すごくきれいな子だよ」

きれいな子……？

――ミストは怒りを感じた。

「ノルン……」

「あ、ええと。そう言うきれいじゃなくて…」

「どんなきれいなのかな…？」

「ええと…ミストも綺麗だよ」

「えっ？」

「あつてみたらわかる。今日うちよつてかない!？」

あつ、話を変えた……

でも、綺麗…

――二人は『Norn』に着いた。

「ただいま」「お邪魔します」

「おかえり、昨日の子来てるよ」

「ノルンさん、さっそく来ちゃいました。今日はお母様もつれてきました」

「小さい子がノルンに駆け寄ってくる。10歳くらいだろうか？」

「ミストが一目その子を見て感じたのは

きれい……

「ミスト、この子がさっき言ってた子、アリシエル。アシルって呼んであげて。アシル、このお姉さんは学院の友達で、ミスト。」

「ノルンは一気に二人を紹介した。

「よろしく願います。ミストお姉ちゃん」

「よろしくね、アシルちゃん」

「ノルンさん、ミストお姉ちゃん。こっちこっち」

あれ……？ ミーナどうしたんだろう……？

「ミーナはカウンターの奥で浮かない顔をしていた。

「自己紹介が終わるとすぐ、アシルは二人を奥の方に呼んだ。

「そこには剣を携えている女性が居てた。

「あなたがノルンさんね。昨日はアシルがお世話になりました。私はエリアと申します、アシルの母親です」

「あ、はい。ノルンです。で、こっちが」「ミストです」

「エリアはね！！すっごくつよい剣士なの！！」

剣士なんだ…

どうりで…

「エリアはやせているが、服の上からでも鍛えられているのかわかる。」

「さつきノルンさんとミストさんの戦い見せてもらいました。すばらしい戦いでした。あなた達強いのね」

「『Norn』には、アルヴァからもらった二人の決闘のMagiCROMをおいている。」

「いえ、そんな…」

「ありがとうございます」

「二人の返事は対照的だった。謙遜したミスト、自信満々にいったノルン。」

「あのエリアさん、今日の戦いも見てくださいか？」

「ミスト…」

強い剣士の意見…

きつと参考になるよね

「それは是非見せて欲しいですね」

「私もノルンさんとミストお姉さんの戦いみたいです」

「俺にも見せてくれ。ミストさんが剣をどれほど使いこなせているかを」

元々そのつもり…

「はい。ミーナも見ない？」

「ええ……」

なんだか元気無い……？

――六人でM a g i c R O Mを囲んで見た。

――M a g i c R O Mには、ノルンの試合とミストの試合が入っていた。

「ミストさん、ちゃんと使いこなせてるね」

マークさん……

「ありがとうございます！」

「ミストお姉ちゃんもノルンさんも強い」

「ありがとね、アシルちゃん」

「ありがとっ、アシル」

――エリアは黙っている。

「あの……、エリアさん。どうでしたか？」

「ええ……、ミストさんの戦いは負けはしたけどすばらしかった」

「ありがとうございます。あの……私には何が足りないんでしょうか？」

良い剣持つてる……

体も鍛え上げた……

魔法も結構使える……

でも、勝てない人がいる

なにが足りないんだろう…？

「ミストはアルヴァに……いや、ノルンに負けてからずっと考えていた。」

「スタイル、もっと自分の戦い方を研究した方がいい。今のミストさんは教科書通りの動きを完璧に使っているだけだ。ミストさんは才能も実力もある、自分だけの戦い方を見つけたらもっと強くなれるよ。」

スタイル……

私だけの戦い方かあ

「あの俺は？」

「ミストへのアドバイスが的確だと判断したのだろうか、ノルンもアドバイスを欲しそうだ。」

「ノルンさん……今日の戦いは酷すぎる」

「！？」

「エリア！？なんで!?!」

ノルンの戦いが酷い……？

私は良かったって思う……

「ミナは元気がなく口をはさまなかった。」

「マークにも思う所があるんだろうか、何も言わなかった。」

「エリアはアシルを無視する。」

「あの……どこが酷かったんですか？」

ノルン……ちょっと怒ってる……？

「結果を見れば、圧勝だったね。でも、君はこんな戦いしていたらこれ以上強くなれない」

「なんで……なんでですか！？ 俺は勝ちました！ 今はまだアルには勝てないけど、強くなってる。ミストにも勝ってる！！ なのに……なんで!？」

――ノルンの言ってることは支離滅裂だ。

――普段、怒ることなんてほとんどない。

ノルン……

怒るのも当然だよね……

人一倍努力して、もっと努力してるのに、強くなれないって……

「わからないの？ ……わかりました、一手だけ教えてあげる」

感想戦・ダメ出し（後書き）

一日更新遅れましたT T

感想・評価お待ちしております<>

壁（前書き）

ノルン視点にもどります。

壁

「一手だけ教えてあげる」

――エリアはそう言い、ノルンに外へ出るよう指示した。

俺は強くなれない？

あの戦い、そんなに悪かったか？

俺は勝った、それが結果だ！！

――ノルンにはあの戦いが悪かったとは思えない。

――ノルン、ミスト、アシル、エリアは公園に着いた。

――アシルはおどおど、ミストはわくわくしている。

――エリアは剣を構え、

「さあ、やりましょうか」

――ノルンも剣を構え、頷いた。

シュッ

――すぐにエリアは攻撃してきた。ノルンは避け、すぐに反撃をする。

強いな……

多分、勝てないだろう……

でも、ついていける――！！

「エリアの剣はそこまで速くなかった。
一手加減しているのだろうか、ノルンがぎりぎり対応できる速さで戦っている。」

「あの戦い、君は勝って当然と思っていたね？」

「…… 負けることなんて考えていなかった

」

「勝って満足？ 楽しかった？」

「……」

「ノルンは答えない。」

「あの戦いは勝つ為に戦っていたの？」

「あっ……」

「ノルンは気付いた。」

「強くなる為に戦っていたんだ……」

「あんな無理矢理な勝ち方……」

「あんな戦いしてたら……」

「強くなれない！！」

「わかったみたいだね。君とミストさんの戦いは楽しそうだった。でも、あの戦いは勝つことだけを考えていたね？」

「はい……」

「戦いを楽しみなさい。それが私からの教え」

「……はい！」

――そのとき、ノルンの剣はエリアのほほをかすった。

「今のはなかなか……じゃあ、もう一つ。君はなぜ強くなりたい？」

「……勝ちたい相手がいます」

「その相手に勝ったら？」

アルに勝ったら……？

そんなの考えたことなかった……

「……わかりません」

「君は何の為に戦うの？ その答えが出れば、君は強くなれる」

カキツーン

――ノルンの剣は地面に突き刺さった。

「一年後……本気で相手してあげる」

――ノルンを認めると……

――夜――

――その後、ノルンはエリアとアシルとは別れ、ミストと『Nor
n』に戻った。

――帰ってきたノルンを見て、マークは『よく考える』と

――普段のの親ばかのマークらしからぬ厳しい言葉を送った。

『よく考える』かぁ……

何の為に戦う……

ミストは『力を持たない人を守りたい』って言ってたな……

俺は……

アルに勝った後かぁ……

――その時、ノルンはある決心をした。

壁（後書き）

今回はだいぶ短めですT T

感想、評価待ってます^^

決心

――次の日の昼――

――ノルンは珍しくアルヴァを訪ねた。

――二人は屋上に着き

「で、ノルン、何のようだ？」

「今日は真剣な話なんだ」

「ほお」

――ノルンはアルヴァを真剣な目で見据える。

「……」

――アルヴァはいつもと違うとわかったようだ。

「……話してみる」

「ああ。……アルヴァは何の為に戦うんだ？」

「……答えにくい質問だな。強くなるためだ」

「じゃあ、何の為に強くなるんだ？」

「……」

……アルにもわからないのか？

「それをお前が俺に訊くかよ……」

――アルヴァは呆れている。

なんだ…？

「…？」

「お前に…ノルンに勝つ為だよ」

！？…俺に？

いつも俺が負けているのに…？

「……俺はアルに勝ったことないぞ？」

「…本気のお前に勝ちたい」

「俺が本気じゃない？」

「……ああ、俺が気付いてないと？」

本気じゃないか……

――アルヴァと戦うときは闘技ではないにしろいつも本気だ。

――ノルンが手に入れた力、全てを出して戦っている。

――それでも、本気ではないとアルヴァは言う。

――ノルンはアルヴァの目を見る。

――真っ直ぐ、真剣な目でノルンを見ている。

冗談じゃないみたいだな……

――ノルンは決心した。

「…アルヴァ」

――ノルンは、普段アルヴァの名前をちゃんと呼ぶことはない。

「決闘をしよう」

「……………そうきたか。……………ああ、わかった」

二度目の真剣勝負……………

「俺は本気で勝ちに行く。だから、アルヴァ初めから本気で来いよ」
「やつとか……………」

「――アルヴァは待ち望んでいたみたいだ。
――二人はお互いライバルを見据えている。
――そして……………」

「「絶対負けない」」

――二人の声が重なった。

――もう一つノルンには聞いとかなければいけないことがあった。

「後一つ、……………アルは本気の俺に勝ったら、その強さで何をしたい？」
「……………」

「……………さあな、勝ってみないとわからない」

俺と同じか……………

「――ノルンもエリアに『勝ったら？』の答えに答えられなかった。
――勝てないからわからない。ならば、勝ったら答えがでるんじゃないかと……………」

「――『手続きはしとく』とノルンは言って、先に出て行った。

準備をしなきゃ……………」

――手続きをし、明後日の朝に決闘が決まった。
――その日の夜、ノルンはマークとミーナにそれぞれ話を付けた。

決心（後書き）

今回も短めですT T

次からいつも通りに戻します<>

感想・評価お待ちしております^^

二人の過去（前書き）

一気に決闘当日に飛びます。

二人の過去

「……六年ぶりだな」

「そうだな。……さあ、闘^やろうか」

――ノルンとアルヴァはお互い武器を構え向き合っている。

――アルヴァの武器はメイスだ。それもマークが作ったもの、非常に強力な武器。

――先に魔導石が付いている。

――審判が両者を見渡し

「両者！――

「……ノルン、六年前からお前に勝つのが目標だった」

――アルヴァは審判が話しているのにも関わらず話し続ける。

「お前……あの時、わざと負けたよな？」

「……」

――ノルンは答えない。

「……わざととわかっていて勝ちをもらった俺を……許せない！！」

あの時かあ……

ばれてたんだな……

――六年前――

――『Norn』に、アルヴァ一家が来ていた。

――それまでもよく来ていたが、この日は特別だった。

「さあ、ノルン、アルヴァ君。準備はいいかな？」

――マークは二人に確認する。

――二人は頷き、マークに連れられ外へでた。それに続き、ミーナとアルヴァの両親が外へ出る。

「さあ、二人の初めての闘いを始めようか」

――ミール共和国では10歳から武器を持つことが許されている。

――この日は、ノルンとアルヴァが初めて武器を使う日だった。

――お互い、模擬の武器で使い方は心得ている。

――二人の武器は魔導石が埋め込まれた剣だ。

「相手に遠慮せず、全力で闘いなさい。それでは……」

――マークは二人を見て

「開始」

シュツ

――先にノルンが攻撃をする。

――それをアルヴァは受ける。

「火よ（フェウ）」

――ノルンは避け、一旦引く。

――そして、ノルンは攻撃動作につつり、近づこうとすると

「火よ（フェウ）。水よ（エアウ）。雷よ（トントレ）。木よ（アベレ）。土よ（ソレ）」

いつきに!?

――アルヴァは自分の異能を惜しみなく使い、全ての属性を一度顕現させる。

――この年では、アルヴァでも指示はだせなかった。

よける!

――その時、ノルンはアルヴァを見てしまった。

「はあ……はあ……」

つらそう……

――この歳のアルヴァでは一気に魔法を使うことは厳しかった。

――アルヴァはノルンの唯一の友達だった。

――そんなアルヴァの様子を目のあたりにしてノルンは避けられなかった。

「ぐっ……」

「アルヴァ君の勝利」

ぼくのまけか……

――二人の両親はお互いに寄って行った。

――両親は『よくやった』など声をかけている。
――そんな中、アルヴァはノルンをにらんでいた。……ノルンはそのことに気付いていなかった。

あの時かあ……

あのまま闘っていたら俺の勝ちだったな……

「……俺もわざと負けた自分を許せない」

「……お互い強くなつたな……」

「ああ……」

――お互い六年前の相手と比べている。

「手加減なしだ」

「わかつてる、俺の全てを出して勝つ」

「俺が勝つ」

――二人が話している間に審判の話が終わった。

「……では、両者、よろしいでしょうか？」

「……はい」

――二人は『よろしく』とは言わない。

――この決闘は二人にとって六年前の続き。

「では……決闘開始!!」

――六年越しの闘いが始まった。

二人の過去（後書き）

過去パートです^^

感想、評価待ってまーす

決闘1

「決闘開始！」

――観客は騒いでいる。

――闘技場を埋め尽くすほど観客。

――授業に出ずに見に来ている生徒、教授、町の人、ノルンの親。
――いろいろな人が二人の闘いに注目していた。

――だが、そんなことは二人には関係ない。

――ノルンは剣を一本構えている。ノルンの腰には構えている剣とは別に一本携えられている。

「…光と影よ（ルミエレ エトウ オンブレ）…暗まし輝け（レ
ディシミール エトウ エラット）」

――唱えたのは、ノルンの方だった。

「魔法…それも光影魔法かよ……」

――光影魔法^{こうえい}、火水木土雷の属性魔法の外にある特殊魔法の一つだ。
――希少な才能がないと使えない。おそらく、学園で使えるのはノルンのみだろう。

――特性は強力の一言に尽きる。

――『光は全ての物を破壊し、影は全ての物を飲み込む』

――ノルンを中心に暗くなる。

――アルヴァは驚きながら

「我が魔力よ（モン ポヴォイア マギクウ）、純粹な物理の力で我を覆え（コーブレスモイ ポウヴォイ フォシクエ ピウ）」

――アルヴァが詠唱を終えた頃には、アルヴァの所まで暗さが広がっていた。

――そして、次の瞬間。

「うつ…」

――ノルンからまばゆい光が放出された。

――その変化にアルヴァの目は付いていけない。

今だ！

シュツ

――アルヴァが目をくらましている所をノルンは斬りかかる。

――しかし、ノルンの剣はミストの時とどうよう魔力の壁に防がれた。

ここまでは予定通り…

「驚いたが…まだ剣は届いてないぜ」

「…まだ一つある」

……ふう……

「ハア――！！」

――ノルンは声にだし

ポアッ…

――剣が薄く光る。

――魔力による発光。

ピキッ……ピキ…ピキ………ピキッー

「なっ!？」

――アルヴァの魔力の壁がなくなった。それと同時にノルンの剣も粉になり柄だけが残っていた。

――ノルンにはまだ剣が残っている。しかし、ノルンは攻撃はしない。

――お互いそこで硬直する。

「…なんで、斬らない？」

「アルヴァ、君には正々堂々勝ちたい」

こんな不意打ちみないな勝ちはいらない!!

「……なるほどな」

――ノルンはアルヴァから離れて行く。

「…それがお前の力か？」

「……俺のじゃない」

俺は…この力を認めるわけにはいかない……

――ノルンは背を向けながら続ける。

「この力は…母さんと父さんの力だ……」

「そういうことか…」

わかったみたいだな……

――ノルンは開始位置に戻り、あらたな剣を構え直すと

「……仕切り直しだ」

決闘1（後書き）

投稿で す^^

ちよつと短いすね…T T

感想・評価待ってまゝす<>

決闘2（ノルンの力）（前書き）

前投稿した次の日に見直したら……

これは……

ってなつて、一旦消しましたT T

すみませんm (_ _) m

書き直したので再投稿です^^
ストーリーは変わっていません< >

決闘2（ノルンの力）

――決闘の前々日――

――ノルンはマークの部屋を訪ねた。

「父さん、今いい？」

「ああ。いいぞ」

――部屋に入る。

――ノルンの腰には、剣が携えられていた。

「うん？家で剣を持つのはマナー違反だぞ」

「父さん…、明後日、アルと決闘することになった」

「……やっとか」

――マークは驚かない。いずれ闘うライバルだとわかっていた。

「悔いの残らないようにな」

「ああ……それで父さんに話しとかなければいけないことがあるんだ」

「……」

――マークはノルンの真剣さが伝わったのだろうか、ノルンの目を見ながら

「……言ってみろ」

「……」

――ノルンはなににもいわず剣を構え

「ハア――!!」

――ノルンは剣に魔力を込めた。

――剣が薄く光る。

「それはっ!？」

――マークは今ノルンがやっていることに覚えがあった。

ピキ……

――剣は割れ、粉となった。

「…魔力注入。ノルン……なぜ使えるんだ………?」

――魔力注入、魔力を用いた鍛冶技術だ。

――通常、炎では溶けない物を加工する為の技術だ。

――一定の量の魔力を入れ続けると段々物質が柔らかくなる、魔力のあまり知られていない特性だ。

――この技術は、物体の性質、物体の異物の確認など、鍛冶の知識に精通していなければ使えない。

――なにも知識がない人が行うなら、物質に魔力が入らないだろう。

――ノルンは出来るが魔力の制御が拙いため、粉にしてしまう。

「リビングで話すよ……先に行つてて」

さ、次だ……

――ノルンは次はミーナの部屋を訪ねていた。

「母さん…、明後日アルと決闘することになった」

「そうなの。じゃあ、見に行かなきゃね」

――ミーナはいつもの調子で返す。

「ちょっと……見て欲しいものあるんだけど………」
「うん？ なあに？」

――シリアスな雰囲気にはならない。

――ミーナはマイペースだった。

「光と影よ。（ルミエレ エトウ オンブレ）姿を現せ（パライゼ
ツ）……」

「……ノルンも使えたんだ」

――異能な光景だろう。

――ノルンの体を中心に片方には光、片方には影ときれいに別れていた。

――ミーナは落ち着いている。

――だれが持つていてもおかしくない才能だ。

「リビングで話すよ……」

――ノルンはミーナを連れ、リビングへ行った。

――ノルンはミーナとマークに向かい合って座っている。

「「「……」」」

――ノルンが話すのを待っている。

「実は俺…異能持ちなんだ……」

「ほお……」

「そうね……」

……うん？

――ノルンは予想の斜め上をいく返答に戸惑った。

「ええと……それだけ？」

「ああ。異能持ちなら納得いくこと多いかな」

「そうよね〜。昔から子供っぽくなかったからね〜」

父さんも普通だ…

――ノルンはマークが帝国出身なので、亜人には偏見があると思っていた…

「どんな異能なの？」

「…『遺伝』の異能。…父さんと母さんの才能と知識、結構受け継いでいるんだ」

そつ、それが16年間隠してきた俺の秘密…

「だから、あれが使えたのか……しかし、その異能は……」

「あらあら、素敵な異能ね。私たちのこと受け継いでるだなんて」

「マークは何やら考えている。ミナはロマンチストだった。

あれ？

なんだかすっごい穏やかな感じする…

「秘密を明かしたんだ、ノルンは肩の荷がおりたようだ。

「…明後日の決闘、母さんと父さんの力借りていいかな？」

「いいわよ。存分に使いなさい…ね、あなた」

「マーク真剣な顔で

「…ノルン。その異能はきつと大変な異能だ…。それと共に生きる…その覚悟はあるんだね？」

わかっている……

一度使ったらもう戻れないことも…

「ミナは話に付いていけない。

「世界で異能に対して研究が行われている。

「ノルンの異能はきつと希少な物だろう。

「…それ以上に危険な物もある。

「…もう覚悟はした」

「ノルンは異能の力を知っている。

「もし、この力がノルンの子へ、そして孫へと受け継がれていくとどうだろう…

「ノルンはその重大さをわかっている。

「マークを真っ直ぐな目でみる。

「そうか…それなら、その力はもうお前の物だ。…勝ってこい」

――決闘――

「仕切り直しだ」

「ハハハッ!!……これだよ」

――アルヴァは笑い出した。顔も笑顔で溢れている。

「これがお前の本気か!!ずっと待ってたぜ!!」

――アルヴァは声を上げ

「ノルン!! 俺は今のお前と闘う為に…いや、勝つために強くなつた!!」

――アルヴァはメイス構え

「お前がいたからこそまで強くなれた!! ……ありがとよ」

――対してノルンも

「俺も。アルヴァ、君がいたから……」

――ノルンも剣を構え

「…君が目標だったからこそまで強くなれた! ……ありがと」

――二人はお互いを見合って

「さあ、こい……アルヴァ」

「いくぞ……ノルン」

――二人の忘れられない闘いが幕を開けた。

決闘2（ノルンの力）（後書き）

過去の話なので、心情描写少なめに…><

そろそろ一部終了な予感します^^；

感想、評価よろしく願います。

決闘 決着（前書き）

結構間空きましたーT
T

決闘 決着

――アルヴァは詠唱をする。

「我が魔力よ（モン ポヴォイア マギクウ）、純粹な力で敵をは
じけ（レトウネズ エネミ パ ポヴォイア）」

――アルヴァの魔法は、魔力その物指示を与える魔法。

――魔法の壁やミストを倒した魔法だ。

――不可視で、詠唱後の顕現が必要ないため非常に速い。

――しかし、一度に2つの命令をすることはまだアルヴァにはできない。

たかが見えないだけで…

――ノルンは不可視の魔法を避ける。

「そんな魔法じゃあ、あたらない！！」

――ノルンはアルヴァの首元に向け、剣を突いた。魔法の壁を作る暇もなく…

――だが

――そこは、アルヴァの首元ではない。

――アルヴァは少し体を傾け避ける。

――ノルンの攻撃は正確だ。最小限の動きのみで攻撃するため、少しの動きのみで避けられる。

「…雷よ（トンネレ）」

――ノルンの上から雷が襲う

「!?!? 影よ（オンブレ）!」

――アルヴァの魔法がノルンの影の魔法に飲み込まれた。

――影はすぐ消え、再びノルンの剣がアルヴァをおそう。

ガツキーン!!!

――アルヴァのメイスとノルンの剣がぶつかった。

――ノルンはすぐさまその場を離れる。

近づきすぎたら魔法でやられる…

――また距離があいた。

――アルヴァは笑いながら

「これは受けられるか!?!? 我が魔力よ（モン ポヴォイア マギ
クウ）、純粋な力で敵をはじけ（レトウネス エネミ パ ポヴォ
イア）」

さっきと同じ…?

――ノルンは先ほどと同じ動作で避ける。

「雷よ（トンネレ）、鳴け（アペレ）」

――何もない空間から雷が炸裂した。

「っ!?!?!」

「ノルンは避けなかった。」

「これはっ!？」

「こんな使い方が…」

「魔法は自分の魔力の届く範囲でのみ使用でき、指示を与えることで行動する。」

「つまり、魔法は自分の位置からしか出せない。」

「しかし、アルヴァは魔力を飛ばすことでどの位置でも魔法を出せる。」

「せこいな…」

「…それはお互い様だろ?」

「ああ……光よ(ルミエレ)、解き放て、破滅の力を(ライセ　ポウヴォイ　デ　レ　DEST　デガッジ)」

「ちっ……。我が魔力よ(モン　ポヴォイア　マギクウ)、純粋な魔法の力で我を覆え(コーブレズモイ　ポウヴォイ　フォシクエ　ピウ)」

「シューッ……」

「ノルンの光はアルヴァの魔法の壁を溶かしたが、アルヴァには届かなかった。」

「そのとき、ノルンはアルヴァにちかづいた。」

「さすが、アルだな」

「シュッ…」

「くっ…、もつと楽しもうぜ！！ 水よ（エアウ）」

「影よっ（オンブレッ）…、ああ…光よ（ルミエレ）！」

――アルヴァの水を影が飲み込む。そして、光がアルヴァを襲う。

「うっ…、ノルン、去年の試合のこと覚えているか？ …土よ（ソレ）」

あの時が…

――ノルンの足は土にとらわれた。

「ああ…。影よ（オンブレ）」

――足の周りの土を影が飲み込む。

「あのときが最後の試合だったよな…。木よ（アーベレ）」

――ノルンの足下から木がのびる。

「そうだったな…」

――それを剣でなぎはらう。

去年のあの試合か…

――ノルンとアルヴァは何度も試合をしていた。いつもノルンが負けていたが…

――結果だけを見れば、最後の試合もアルヴァの勝ちだった。

あるとき…俺はアルを追いつめていた……
でも、ミストと同じ……
あの魔力の魔法で負けた…

―その時、ノルンがアルヴァの本気を見た時だった。
―そして、アルヴァは試合が終わると

『…ノルン、もう試合はやめようぜ』

「あるとき、きっとノルンなら、いつか決闘を申し込んでくるって
確信した。 雷よ（トントレ）」
「くっ…なんである時、あんなことをいったんだ？ 影よ（オンブレ）」

―ノルンの出した影がアルヴァを飲み込もうとする。

「木よ（アーベレ）。…さあな、ただ試合より闘技でたたかいたくな
ったからな」

―アルヴァは足下に木で壁を作り、影を避けた。

「そうか」

シュッ

―ノルンの剣がアルヴァを襲う。

「土よ（ソレ）」

――アルヴァは土を水でかため、火であぶり、固い壁を作った。

グサツ

――ノルンの剣はアルヴァの作った土の壁に防がれた。

「なあ…ノルン、この闘い終わったらまた試合しようぜ」

「ああ…、この闘いは俺が勝つからな」

「いや、俺だね」

――二人は距離を取り構え直した。

――周りから見れば異様な闘いだっただろう。

――二人は会話しながら、剣、魔法を使いこなし、攻撃を繰り返していた。

――それも学院のだけれも、追隨をゆるさない実力で…

――しかし、その闘いも終わりが近づいているようだ。

「…次で」

「ああ…次で」

――二人には言わなくてもわかっていた。

『次で最後だ』

「我が魔力よ（モン ポヴォイア マギクウ）、純粋な力で敵をは
じけ（レトウネズ エネミ パ ポヴォイア）」

――先に仕掛けたのはアルヴァだった。ノルンは避ける。

「火よ（フェウ）、水よ（エアウ）、雷よ（トントレ）、木よ（アーベレ）、土よ（ソレ）。力を解放し（ライセ デ ボボア）、終わらせ（レガチ エト チマイン）」

この魔法は…！

――ノルンの避けた所から魔法が炸裂する。

――その魔法は全属性の最上級魔法。

――全属性の力がノルンを襲う。

なら、俺も…

――ノルンも

これが俺の最大だ！！

「光と影よ（ルミエレ エトウ オンブレ）。すべてを破壊しすべてを飲み込め（デトルイ エト アヴルイ トウト）」

ドッーンッ……

――爆音が鳴り響き、砂煙、霧、木屑、火の粉、電気が宙にまみれ、光と影が渦巻いた。

――闘技場中の視界が遮られる。

終わってない！！

――ノルンは見えなくても前に進む。

「我が魔力よ（モン ポヴォイア マギクウ）、純粋な物理の力で

我を覆え（コーブレスモイ　ポウヴォイ　フォシクエ　ピウ）」

見えないッ！？

――ノルンはアルヴァの姿が見えない。

――だが、ノルンにはアルヴァの詠唱で位置がわかった。

「ハーーーーッ！！」

――剣に魔力を込めた。

きつと…

キーンッ！！！！

――ノルンの剣と魔力の壁がぶつかった。

――ノルンの剣は剣身が無かった。

――視界が明らかになっていく

「ちっ、壁壊されたか…」

「……楽しかった」

――ノルンの剣身のない剣はアルヴァの腹にあった。

「…俺もだ……俺の負けだ………」

ドサッ……

――アルヴァが倒れ、その場に立っていたのはノルンだった。

『ワアアア——！！！！』

——闘技場は歓声で爆発したが……

——ノルンはただただ倒れたアルヴァをみてたらずむだけだった。

勝った……でも……

決闘 決着（後書き）

一部完！！って感じです＜＞

感想、評価よろしく願いします。

閑話 Hello

――これはノルンの出生の話――

「おぎゃ――!!」

こえがでる……。

あ、そうか……

…ぼくうまれたんだ。

…

……

……

……あれ？ ぼく…まだうまれたばかり……だよね？

――少年は生まれて初めての疑問を持った。

――自分自身への疑問だ。そして…

――そのとき、少年に莫大な知識が一気に流れ込んだ。

――少年は看護士に抱かれ、母親とともに分娩室から出た。

「あなた…」

「よくがんばったな。」

――父親は涙ながらに、母親に駆け寄った。

「ええ。…それよりも私たちの子よ…」

「ああ!! 俺たちの子だ!!」

――少年は自分の知識を理解した。

そっか…ぼくいのうもってるんだ。
それよりも……

――少年には異能のことより、もっと重大なことがあった。

――少年は顔を上げ、母親と父親を見比べた。

このひとたちが、おとうさん、おかあさん…ね。

「おぎゃ――――おぎゃー、おぎゃー」

――少年は両親に声を向け

（はじめまして、おとうさん、おかあさん）

閑話 H e l l o (後書き)

めちゃくちゃ短いです<>

感想、評価待ってます

今月中には第二部始めます^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6192s/>

戦えない力

2011年6月1日21時14分発行